Lesson 07

日本の物語から
——フィクションと寓意

小嶋菜温子

物語の批評性——寓意と〈非-知〉　日本の物語から、文学について考えてみる。ここでは、『竹取物語』や『源氏物語』などの王朝物語の類を中心に述べるが、その延長線上には近世（江戸期）の戯作（げさく）をはじめとする読み物や、近代（明治期）以降の小説類があることは言うまでもない。王朝物語の系譜はいわゆる擬古物語の類に受け継がれただけではない。古くは中国の小説の、そして近代以降は西洋の小説の影響を受けながら、日本の物語の系譜は現代小説の地下水脈として今なお生き続けている。

詩歌の言葉の魅力もさることながら、物語の言葉の魅力はいわく言いがたいものがある。その魅力の源泉はどのあたりにあるのだろうか。物語の命脈は、筋書きの面白さや表現・描

写の技巧はもとより、そこに籠められた寓意[*22]の鋭さにも見るべきである。いわば物語の内なる批評性は王朝物語からすでに胚胎していたのであり、ゆえに現代に至るまでその系譜は続いてきたのだと考える。

まず、物語が物語である所以について確かめておく。物語の要諦は、語りの様式にあると言ってよい。たとえそれが文字で書かれたテクストであっても、物語が語りの様式を基盤とする点で、昔話やお伽話などの口承による語り物とは不可分であるとしたのは柳田國男（一八七五―一九六二年、近代国文学・民俗学の先駆者。民話研究を通して、日本文学の発生と展開を俯瞰的に見通した）であり、それはいまや定説化している。かぐや姫や桃太郎などの昔話と、光源氏の物語、あるいは『平家物語』の平清盛の語り物は、語られた話という意味において等しいと考えるのである。

「昔々……」と語り出される昔話と、琵琶法師によって口演された『平家物語』とのあいだに共通項を見出すのはまだしも分かるとして、それらと『源氏物語』などの書かれた物語がどう繋がるのか。それについては、文体の問題から理解することができる。文字で書かれた物語も、その文体は語り手が聞き手の誰か（個人もしくは集団）に向かって語る、「いつ…どこで…だれが…なにを…どうした」という、5W1Hの基本形式からなる。その文体が、昔話などいわゆる民話の語り（narrative）と通じる、ということである。

ここにプロップ（U・プロップ、ロシアの民俗学者。『民話の形態学』に代表される物語の構造分析の先駆者。レヴィ・ストロースの神話の構造分析などに影響を与えた）の発見した、話型の普遍的な役割がある。民話の話型に代表されるような語りの形式は、たとえば漫画やTVドラマ・映画あるいはゲームの中の物語にも浸透している。現代に再生産されるそれらの物語も、語りの形式を基本として語り手と聞き手のコノテーション（connotation、言語記号によって示される潜在的・多層的な意味の場）を作り上げる。プロット（plot、物語・小説などの筋書きや構造）の積み重ねと、大団円のハッピー・エンド（もしくはバッド・エンド）に到る過程そのものが、カタルシ

22

コラム——基礎術語

寓意　諷喩とも言う。西洋の古典修辞学におけるアレゴリー（allegory）に当たるもので、物語テクストの世界に見出される、比喩的な意味や体系のこと。象徴的（symbolic）な記号の働きとあわせて作品世界に奥行を与えるとともに、読者論が盛んとなる20世紀の文芸批評において、テクストの寓意的機能は再評価されることとなった。

スへと誘う。昔話やお伽話の構成は、現代においても反復されているわけである。

かつて蓮実重彦『物語批判序説』が行った〈物語〉批判は、〈知〉の類型の確認に対するものであった。しかし、はたして〈物語〉は〈知〉の類型をなぞるだけであろうか。確かに、既知の枠組みへの依存をぬきにして、〈物語〉は構造化できない面もあるが、それだけで成り立つものではない。型破りもまた、物語を活性化させる。『源氏物語』などはそのよい例であり、どっちつかずの結末が読者の心に波紋をなげかける効果をもたらしたりする。〈知〉の構造化を通して、既存の〈知〉の枠組みを問い直す。あるいは〈知〉の類型を壊しながら、未知の〈知〉に挑むという、刺激的な営為としての〈物語〉の面白さに、ここでは注目してみよう。

〈物語〉の歴史を見わたしながら、その〈知〉の軌跡を浮き彫りにしようとするには、通時的な視点が有効である。その際、古典と現代（あるいは前近代と近代）というような区分が無意味であることは言うまでもない。わたくしにしても、専門領域とするのは古典文学研究であるが、その立脚点は常に現在に置いている。近代文学の起源を問いながら、古典文学に向き合うというスタンスで、〈物語〉の成り立ちを探っている。日本の歴史と社会の中で、文学が果たした役割は何か。そのことを考えるため、以下では物語における寓意の歴史から、その批評性の質を探ってみる。

日本の物語の寓意性については、近世の思想家や文学者たちによって早くから論じられていた。『雨月物語』という有名な近世の物語（「菊花の契り」などの短編を収めたもの）があるが、その作者である上田秋成（一七三四－一八〇九年、国学者で浮世草子・読本も著した）は自らの物語観を次のように述べた。

> そも物がたりとは何ばかりの物とか思ふ。もろこしのかしこにもかかるたぐひは。ひたすらそらごと（寓言）をもてつとめとし。専ら其実なしといへども、必ずよ。作者の思ひよするところ。あるは世のさまのあだめくを悲しび。あるは国の費えをなげくも。時のいきほひのおすべからぬを思ひ。くらゐ高き人の悪みをおそれて。いにしへの事とりなし。今のうつつを打ちかすめつつ、おぼろげに書出でたる物なりけり。（「ぬばたまの巻」）

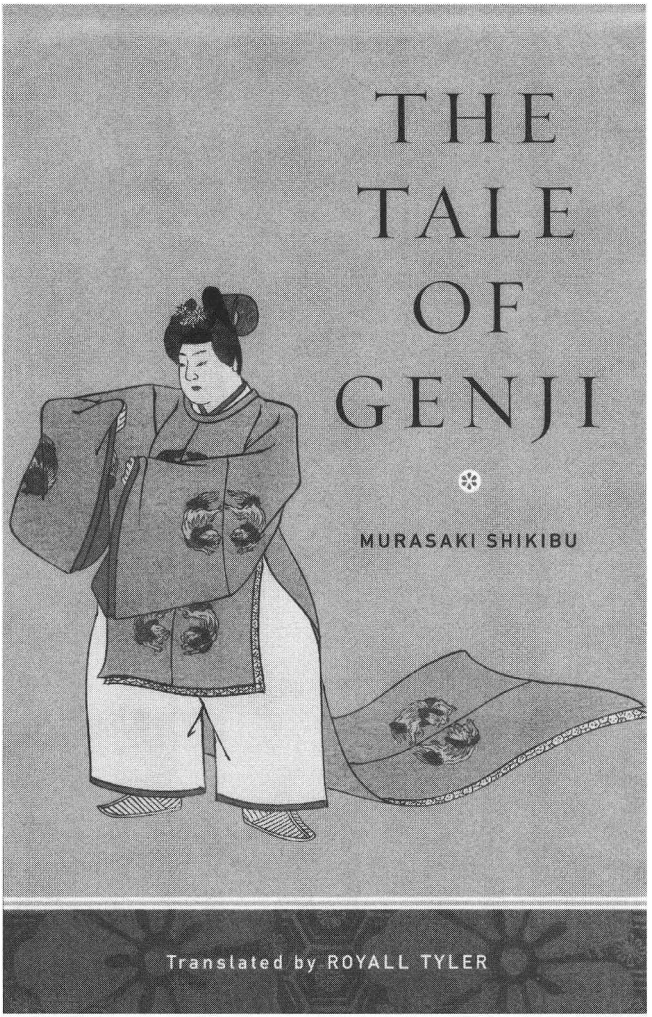
物語は「そらごと」で「実」がないという批判（中世以降、仏教的な発想からの物語批判によって、物語は「狂言綺語」「雑穢語」すなわち出鱈目で猥雑なるたわ言として指弾された。ちなみに『源氏物語』を書いたために紫式部は地獄に堕ちたとされたりした）に対して、秋成は作者の「思ひよするところ」すなわち寓意を忖度すべきだとする。寓意される内容として秋成が挙げるのは、「世のさまのあだめく」ことや、「国の費え」への慨嘆である。つまり、世相や国情への批判に

ついての寓言に、物語の本義を見ようという見解であったと言える。こうした物語観は秋成独自のものではなく、清田儋叟が「吾国ノ寓言ノ書、予ガ見ル所ニテハ源氏物語ヲ第一トスベシ」（『孔雀楼筆記』）と『源氏物語』を日本の「寓言」書の第一として評価するなど、近世の国学者や文学者に広く行きわたっていたとされる。『源氏物語』の寓意性は、はたしてどのようなものであったかを、次に見ておこう。

『源氏物語』の物語論　『源氏物語』蛍巻には、物語論が展開される有名な箇所がある。光源氏が玉鬘（源氏のライバル・頭中将と、故・夕顔のあいだの娘で、源氏が養女としてこっそり育てている）と、物語をめぐって対話する場面がそれである。一面でそれは、仏法の説諭の枠を借りた、子女教育論の意味を持っていることは、三角洋一「蛍巻の物語論」『源氏物語と天台浄土教』（若草書房、一九九六年）の論じる通りである。と同時に、この場面は阿部秋生『源氏物語の物語論』（岩波書店、一九八五年）以来、虚構論なり創作論として注目されてきている。

子女教育的な側面は、次のような源氏の発言に窺える。

「あなむつかし。女こそものうるさがらず、人に欺かれむと生まれたるものなれ。ここらの中にまことはいと少なからむを、かつ知る知る、かかるすずろごとに心を移し、はから



図版 1　*The Tale of Genji*（ROYALL TYLER 訳）**表紙**　（2001 年、Viking Penguin）

れたまひて、暑かはしきさみだれの、髪の乱るるも知らで書きたまふよ」とて、笑ひたまふものから、……。

「女」というものは、物語などという「まこと」の少ないものを、それと知りつつ欺かれるように生まれたのだね——物語に熱中する玉鬘にむかって、源氏は皮肉まじりにからかう。さらに源氏は、物語に対して「いつはり」「そらごと」といった否定的な言葉で語る。かたや玉鬘のほうはこれを受けながらも、反論を試みる。

「げにいつはり馴れたる人や、さまざまにさも酌みはべらむ。ただ、いとまことの事とこそ思うたまへられけれ」とて、……

「いつはり」に馴れた人にはそのように見えるかもしれないけれども、自分には物語は「まこと」のことと思われるのだ、と。そう言われて源氏も、むげに物語を否定したことを反省するかのように、付け加える。

「こちなくも聞こえおとしてけるかな。神代より世にある事を記しおきけるなり。日本

紀などはただかたそばそかし。これらにこそ、道々しく詳しきことはあらめ」とて、笑ひたまふ。

神代から物語は、「世にある事」を記したものであり、『日本書紀』などよりも、物語のほうが「道々しく詳しき」ものとして評価できる。つまり、政道にも通じて、委細をきわめているものだよね、と源氏は笑いながら言い直す。その上で、

その人の上とて、ありのままに言ひ出づることこそなけれ、よきもあしきも、世に経る人のありさまの、見るにも飽かず、聞くにもあまることを、後の世にも言ひ伝へさせまほしき節ぶしを、心に籠めがたくて、言ひおきはじめたるなり。よきさまに言ふとては、よき事のかぎり選り出でて、人に従はむとては、またあしきさまのめづらしき事をとり集めたる、みなかたがたにつけたるこの世の外の事ならずかし。……ひたぶるにそらごとと言ひはてむも、事の心違ひてなむありける。

と、真面目に物語の本質について語る。それによれば物語とは、「世に経る人のありさま」を言い伝えるものなのであり、「この世の外の事」を語るのではない。むげに「そらごと」

図版2　土佐光吉「源氏物語図屏風」（桃山時代、メトロポリタン美術館所蔵）

と断じるのは間違いだ、と源氏は物語を擁護して見せるのであった（さらに続けて、仏教の方便と物語との類比をも指摘する）。そこで物語を「いつわり」「そらごと」とする否定的な評価は退けられ、むしろ「この世」の真実を衝くための方便であり、重要なメディアであるとして物語は評価されることになるわけだ。

そうした物語評価を提示しておきながら、さらに一ひねりされるところが面白い。続けて源氏は次のように言いながら、玉鬘を口説きにかかるのであった。

> さてかかる古事の中に、まろがやうに実法なる痴れ者の物語はありや。いみじくけ遠き、ものの姫君も、御心のやうにつれなく、そらおぼめきしたるは世にあらじな。いざたぐひなき物語にして、世に伝へさせん。

いろいろある古物語に、自分のような「痴れ者の物語」はないだろう。物語の姫君も、あなた（玉鬘）ほどに冷淡ではないだろう。わたくしたちの仲を「たぐひなき物語」にして世に伝えましょう。そう言って、源氏は玉鬘にさし寄るのである。困惑した玉鬘は、「さらずとも、かくめづらしかなる事は、世語りになりはべりぬべかめれ」と答えるのに対して、源氏はかまわず寄りかかっていく。戯れかかる源氏の様子は、語り手が「いとあざれたり」と

評されるほどであった。こうなると、物語の意味合いは先程と違ってくる。源氏と玉鬘の微妙かつスキャンダラスな関係を暴くメディアとして、物語は機能してしまうわけだ。

蛍巻の一連の場面を通して浮かび上がるのは、まさしく物語なるものの多義性にほかならない。「いつわり」「そらごと」と、「まこと」。その両極を往還する柔構造として、物語はある。時には巷の噂よろしくスキャンダラスに、時には仏説のごとく真理探究の具として、物語は機能する。紫式部という物語作家の脳裏には、物語というものがそのような豊かなパラダイム[*23]として概念化されていたと見られる。先に見たごとく、近世の国学者や文学者から、『源氏物語』が寓言の書として高い評価を受けたのは必然と言うべきであろう。

かぐや姫の結婚——貴種流離譚と〈家〉　ここで、日本の物語の歴史をざっと振り返っておこう。日本文学史における散文の歴史は、古代における神話（『古事記』・『日本書紀』）を嚆矢として、平安朝から本格的に開始する。そこに至るまでには、遣隋使・遣唐使・遣新羅使などを通して、中国や朝鮮半島の先進文化の影響を大きく受けながら、国風文化を醸成していく時間が必要であったことは言うまでもない。その事情は韻文の世界においても同様であり、奈良時代の『万葉集』から、平安時代の初期に編纂された『古今和歌集』以下の勅撰和歌集が生み出されるに先立ち、漢詩文の影響を反映した勅撰漢詩集の編纂が行われねばならなか

った。

現存する最古の作品として知られるのは、平安初期に成立した『竹取物語』であるが、その作品にも漢文化の影響は少なからず見られる。とはいえ、現存最古の物語としてのオリジナリティは十分に認められ、『竹取物語』の文学性が後代の文学史に与えた影響はきわめて大きい（『竹取物語』以降の文学作品に、かぐや姫の面影をたたえる主人公が多く描かれる）。『竹取物語』の〈知〉の水準には、侮りがたいものがあるのである。

竹から生まれ、月に帰る、美しい人――かぐや姫の物語。『竹取物語』の粗筋は、日本人

23

コラム――基礎術語

パラダイム　ある集団や社会を支配する規範的な型のことで、トマス・クーン『科学革命の構造』(1962) によって一般化した言葉。クーンの理論によれば、科学の進歩と再編が引き起こされるのは、現行の思考の範型が新たな範型へと移行する（これを paradigm shift と称する）ことによると言う。クーン以降、広く思考全般の基本的な枠組みについて、パラダイム理論が援用されるようになった。

もしくは日本に長く住む人なら、ほぼ誰でも知っているのではないだろうか。TVコマーシャルなどで、かぐや姫のイメージがよく使われることでも、それは明らかだ。小野小町に並んで、かぐや姫が古典的な美人を代表するキャラクターであることは疑いない。それにしても、このような美女を主人公とする物語が、なぜ平安時代の初期に登場したのだろうか。もしも『竹取物語』のかぐや姫がいなかったならば、日本文学・文化の歴史は、今日までと色合いを異にしていたかもしれない。

かぐや姫の物語を大掴みにすると、その神秘的な生い立ち（三寸ほどの大きさで、竹の中から現れた）から、貴公子たちによる求婚とその失敗、そして月への昇天という具合になろう。折口信夫（一八八七－一九五三年、釈迢空。柳田國男に師事し、民俗学的な方法による国文学を推進した）は話型として、かぐや姫の物語の大枠は貴種流離譚[*24]に属するものとし、その系譜上に光源氏をも位置づけた。物語や昔話に共通する、日本の古代的な発想の類型として、貴種流離譚の枠組みがあったということはその通りなのであろう。

ただし、『竹取物語』にしろ『源氏物語』にしろ、ただ単に古代的な発想を反映しただけのものではない。いずれの作品世界も、それぞれの時代状況や認識と密接に関わりながら構成されたものであることは言うまでもない。その点について次に、かぐや姫や光源氏の物語における家族関係において、平安時代の〈家〉や〈血〉の枠組みがどのように組み替えられ

ているのかを見ることにしよう。

まず、現存最古の物語とされる、『竹取物語』から。かぐや姫の結婚話には、平安時代の結婚観がよく現れていて面白い。かぐや姫に翁が結婚を勧めるのだが、その時に翁は「男は女にあふことをす。女は男に合ふことをす。その後なん門広くもなり侍る」と言う。男は女と結婚し、女は男と結婚するものだ。そしてその後に、門が広くなるのだ、と翁は言ったのである。「門」とは家門のことを指す。つまり、結婚によって子孫が増え、家が拡大し、繁栄するという認識が翁の言葉には含意されているわけだ。そしてその認識は、『竹取物語』

24

コラム——基礎術語

貴種流離譚　折口信夫が日本文学の根本的な発想の一つとして抽出した話型。折口は『伊勢物語』の主人公である「昔男」（在原業平）の「東下り」の物語や、『竹取物語』のかぐや姫が天上界と人間界をさすらう物語、あるいは『源氏物語』の光源氏が須磨・明石へと流離する物語などをその典型であるとした。そうした話型の根底には、異郷からの「まれびと（客人）」への古代的な信仰が横たわっており、そうした発想が日本神話から物語・説話へと文学史を豊かにしたというのが折口の考えであった。

が成立した時代（正確には不詳。九世紀から十世紀にかけてかとされる）の結婚観、ひいては〈家〉と〈子〉をめぐる規範によると見てよかろう。結婚、そして子どもの誕生という問題が、私的で個人的な領域にとどまらず、共同体的な意味を帯びていることがわかる。このことから、世間を騒がせる〈お世継ぎ〉問題の根深さを理解することもできるが、結婚と〈家〉をめぐる個と社会との二重性の問題は、王朝物語の始発の時点から認識されていたことになる。

しかも、『竹取物語』が面白いのは、かぐや姫が翁の示した規範的な結婚観に抵抗するところだ。貴公子たちの求婚に対しては、難題物を提示した結果、ことごとく袖にし、帝の求愛にも、「きと、かげになりぬ」というふうに目を眩ませてしまう。あげくのはてに、不死の薬を形見に残して、迎えの天人を引き連れて月へと還っていくのである。

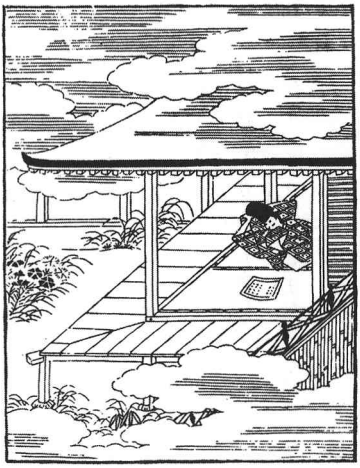
実は、かぐや姫が翁のもとに来たのは、天界で犯した罪を贖うためであり、その贖罪が済んだので月に還るのだということが、天人の口から翁に告げられていた。かぐや姫にとって地上の生活は、まさに貴種流離の時間であったということだろう。そしてその流離の終結によって、地上性は姫にとって意味を失う。結婚や〈家〉といった地上の規範そのものが、まるで無意味なものとなるのである。時代の規範に対する、『竹取物語』の認識の幅は、きわめて興味深いものがあろう。

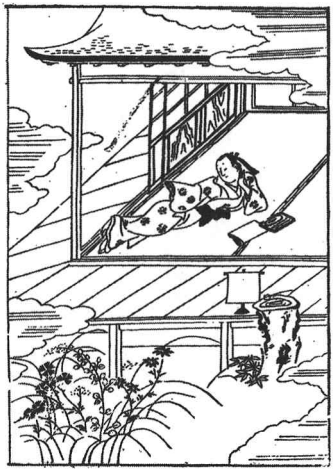
『源氏物語』の〈家〉と〈子〉　では、十一世紀初頭に書かれた『源氏物語』はどうか。『源氏物語』のイメージは、主人公の光源氏が演じる色好みの印象が強いかもしれないが、彼はただ放蕩に明け暮れるわけではなく、さまざまな苦悩や感情を持つ人間として描かれている。結婚形態は、一夫多妻を規範とする王朝社会を背景に描かれる。ただ、その規範が無条件に肯定されているわけでもないところが大事であろう。複数の女性と関係を持ちながら、男としての悩みばかりか、人間としての根源的な悩みも抱えて出家を願いつつ晩年を迎える。もちろん相手の女性たちもまた、とりどりに深い悩みを抱かずにはいられないのだが。

〈家〉や〈子〉をめぐる規範についても、『源氏物語』なりの複眼が見られる。『竹取物語』の翁の言葉に端的に現れていたような、上流貴族たちの理想的な結婚観――〈家〉のための婚姻と子孫の繁栄――は、光源氏のライバルである頭中将などに典型的に描かれる。

ところが、主人公の源氏には子が少ない。夕霧は正妻・葵の上の産んだ息子。冷泉帝は表向きは源氏の弟だが、実は源氏が藤壺と密通してできた子。明石の姫君は明石の君という〝劣り腹〟から生まれた姫君で、後に中宮になる。もう一人、薫という男子が女三宮から生まれるが、薫は光源氏の子ではなく柏木の胤（たね）である。要するに、源氏の子は系図上でも、血縁上でも三人だけということになる。

『源氏物語』は主人公の〈家〉を異例の形で描く。そこに、当時の社会制度や常識に対する





図版3（右）　奥村政信『紅白源氏物語』紅葉賀（1709年、国立国会図書館所蔵）
図版4（左）　山本春正『絵入源氏物語』紅葉賀（1654年）

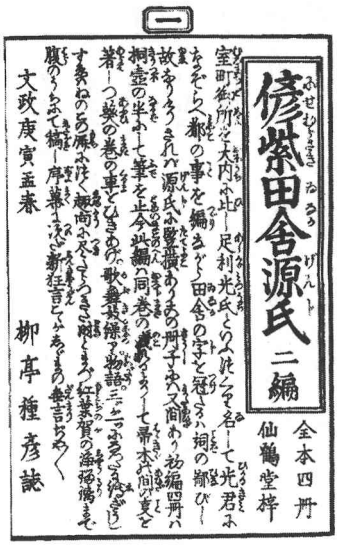
懐疑的なまなざしがあるように思われる。たとえば、明石の姫君がお妃になることに関しても、常識的にはあり得ないような話のはずであった。光源氏は桐壺帝の第二皇子で、母は桐壺更衣という〝劣り腹〟の皇子でありながら、帝寵あつく第一皇子側から敵愾視される。そのため皇族から離脱し、源氏に降格させられた。その源氏と明石の君とのあいだにできた姫君が、お妃になるというのはかなり無理な話だ。

しかし、そうした話を無理のない形で語るために、物語には巧みな仕掛けが施されている。具体的に言うと、儀式の描写などがそれである。〈家〉と〈子〉の儀式の場が、物語を無理のな

い展開たらしめている場面が幾つかある。平安時代の貴族社会では、子どもの誕生にあたっての儀式（生誕儀礼のことを産養（うぶやしなひ）と呼んだ）は重要であった。子供が産まれた日から、たとえば産湯にあたるお湯殿の儀式では、博士が漢文の典籍を読むことなどをはじめとして、特に三日目・五日目・七日目・九日目といった日程で、産養が行われた。そのことは、公家の漢文日記などに確認できる。『源氏物語』に先行する『うつほ物語』などでは、産養をめぐる有職故実（ゆうそくこじつ）（宮廷社会や武家社会における儀礼や式典・官職・法令などについての決まりや作法）に忠実な描写が見られる。『源氏物語』にも『うつほ物語』のような産養の描写があるが、面白いことに主人公の源氏とその実子については産養の描写がない。光源氏は桐壺巻で生まれるが、帝が喜んだことが語られるだけで、生誕儀礼は描かれない。

ところが、罪の子・薫の産養のことは描かれる。薫は光源氏の実子のはずが、実は源氏の正妻の女三の宮が、柏木と密通して生まれた不義の子。薫の誕生は、源氏の〈家〉のためには、おめでたい話であるはずが、その実とても不幸な出来事であった。それは源氏の〈家〉にとって、最大の慶事であると同時に、〈血〉においては最悪の凶事であったと言える。生母の女三の宮は朱雀院の皇女であるだけに、これほどの皮肉はないほどである。

薫のための産養は、五日目と七日目にしぼって描かれる。なかでも七日目（お七夜）の記事は、中宮主催のお祝いの産養があったとか、内裏からも天皇によるお祝いがあったとか、



図版5（上）　柳亭種彦『修紫田舎源氏』二編

右・足利義正の別室　藤の方　藤壺の宮に比。

左・足利次郎光氏　光君に比。

図版6（下）　『修紫田舎源氏』二編（1829年）　江戸時代には古典のパロディ化が盛んになる。『修紫田舎源氏』もその一例。

詳しい記述が見られる。そうした盛大な儀式の影で、光源氏は苦渋の思いを味わわねばならないのである。「大殿の御心の中に心苦しと思すことありて、いたうもてはやしきこえたまはず、御遊びなどはなかりけり」と本文にはある。源氏は心苦しいとお思いになることがあったようで、おはしゃぎにもならずに、管弦楽のお遊びなどもなかった、と。常識的に見れば、源氏の〈家〉の慶事に違いない場面を逆手にとって、実に皮肉なニュアンスが醸し出される。こういうところが、『源氏物語』の巧みな仕掛けであると言えよう。

光源氏の娘・明石の姫君の場合も問題である。姫君自身が生まれた時は、産養のことは語られない。かわりに、明石の姫君が入内して皇子を出産する段になると、盛大な儀式が描かれることになる。明石の姫君その人は母が〝劣り腹〟であるというハンディがあった。そこで、社会的な派手な儀式は極力避けられている。入内直前の裳着（もぎ）の儀式（着裳とも。女子の成人式。平安時代では十二歳から十四歳頃を中心に、結婚に先立って行われることが多かった）において、はじめて盛大な儀式描写が出てくる。それによって、姫君はようやく宮廷社会の一員として認知されたことになる。そこに至るまでは、周到に節目の儀式は語られないようになっている。たとえば袴着（はかまぎ）の時は、光源氏が「袴着をちゃんとやってやるから、京都に連れておいでなさい」と言って、母の明石の君を説得して、京都に姫君ともども呼び寄せる。そうしておきながら結局は、姫君を母親と引き離して自分のもとに連れて来させる。袴着はどうなった

かというと、約束したわりには、中途半端にしか語られない。「いつも賑やかなお屋敷だから、あまり変わりばえがしなくて」というふうにしか書かれないのである。姫君の産養のことが省かれ、皇子を産んだ時の産養が盛大に描かれるのも、物語の都合に合わせて意図的に描き分けられたものとしうる。

そして『源氏物語』の中で最も詳しく描かれる産養は、後半部の宇治十帖と呼ばれる部分に見られる。光源氏が亡くなった後の第二世代、第三世代の話だが、そこで宇治の中君という姫君が子どもを産んだ時のことである。宇治の中君は、源氏の兄弟・八宮の娘。八宮は政治的に失脚して没落して、宇治に隠棲するうちに妻も亡くして、男手一つで姫君たちを育てた。その中君が、匂宮という将来の皇太子候補（母は明石中宮）と結婚して皇子を産んだ。その皇子の産養が、三日目から九日目までの全日程にわたり、実に盛大に描かれる。その儀式の描写から、この皇子が社会的な認知を早々と受けたことが暗示される。ただし、この皇子が物語の主人公になることはない。物語の焦点は、生母の中君の立場のほうに合わせられているからだ。

つまり、『源氏物語』の儀礼の描かれ方は、時代のスタンダードから外れたところから発想されている。生誕儀礼が語られる場合にも、その〈家〉の儀礼を主催する側と受ける側との関係性において、正常ならざるドラマが生起する仕組みがあるということになる。密通に

よる血統の乱れ。あるいは母方の身分が低いなど、血筋の劣りがある時。さまざまな状況に応じて、産養の儀式は機能しているのである。ここに時代の常識に対する、作者の批評的な意識が窺えるのではないか。時代の規範から逸脱する人間模様をクローズ・アップする場として、〈家〉の儀礼を利用する。近世の国学者や文学者が行ったのとはまた異なる角度から、『源氏物語』というフィクションに籠められた寓意を、わたくしたちは読み取るべきであろう。

文学とは何か　見てきたように、『竹取物語』や『源氏物語』といった平安朝の物語を起点とする日本の物語史は、その認識の水準において、きわめて高いレベルを示している。平安時代における人文学的な〈知〉の体系は、漢文化を基盤とするものを除けば、文学と、その周辺の体系化は進んでおらず、近代的大系に基づく思想・哲学・倫理あるいは心理学・社会学といった区分は明確化していない段階であった。そうした環境にあって、物語は、われわれの想像する以上に、重層的な〈知〉の受け皿となっていたと思われる。

ならば、これからの物語はどうなっていくのだろうか。冒頭でも触れたように、情報化が進む二十一世紀の現在、メディア情況が文学シーンに与える影響は無視できない。先例として、たとえば江戸時代の印刷革命による戯作文学の台頭などがあるが、二十一世紀のメディ

ア革命はさらなる大衆化を文学シーンにもたらすことになるだろう。ネット文学などに見るごとく、さまざまな形でのマス・メディアの進化とともに、文学の形態にはさまざまな変化が生じつつある。それが、文学の本質的な転換を意味するのかどうか。文学の危機を憂う声も聞かれるが、そうした時こそ文学をめぐる認識が問われていると考えるべきなのだ。

わたくしたちの講義の大事な目的は、さまざまなテクストを通じて、文学とは何かを考えることにある。もとより文学の本質をめぐる考察などというものが容易であるはずはなく、まるで雲を掴むような作業に終始しかねないだろう。ただ、対象とするカテゴリーが曖昧模糊としていればいるほど、この手の作業には魅惑的な香りがつきまとうことも事実だ（たとえばフランス文芸理論書の類で、そうした類の陶酔感は味わえる）。観念的な言語遊戯に浸りたければ、哲学論に負けず劣らず文学論がお奨めだ。

〝文学論なんて知らないよ〟と言う人も、実は日頃からいろいろな形での言語遊戯に触れているものだ。詩や小説などの、いわゆる純文学（大衆文学に対する。わかりやすく言えば、直木賞に対する芥川賞など）ばかりではない。映画・演劇・TVドラマ、そして漫画・ゲームといった種々のサブ・カルチャーを通して、現代社会なりの言語遊戯が巷には溢れている。

「つれづれなるままに、日暮し、硯に向かひて……」と記した『徒然草』の作者ではないが、浮世の「つれづれ」（現代人なりに、そういう感覚はわかるのではないか）を、言葉が創り上げる仮

想の世界が慰めてくれる。言語遊戯の楽しみは、現代においてなお尽きないと言うべきである。

ところで、文学のカテゴリーの周辺には、思想・哲学・歴史学・心理学・倫理学・宗教学などが隣接して広がる。そしてそのまた周辺領域には、社会学や政治学・経済学・法学などの世界も広がっている。いわゆる純文学の言語世界は、そうした隣接諸領域の〈知〉と完全に切断されてあるわけではない。もちろん固有の言語感覚や方法を追求するべく、文学空間は創出されるものではある。一篇の詩は詩である以外、何物でもない。そのようにして、わたくしたちは詩の言葉を愛でる。しかし時に、その詩的言語に哲学や思想を見出したり、言葉の奥に秘められた心理の襞を通して、何かしら社会的な思弁への回路を見極めようとすることもなくはない。そしてさらにその詩片から滲みでる、不可知の闇の魔力に、魂を震わせるなどということがありはしないか。あるいは、物語という森の深奥へと心をさ迷わせたことは……。そうである時、文学は人知のブラック・ホールとしての輝きを増すのだと言える。

だからこそ、実効性という点で、文学はまるで役に立たない代物としての名誉（？）にあずかる。仮に文学の効き目というようなものがあるとしても、たとえば音楽や映画や演劇といったような諸芸術に比べても極端にスローに違いない。その理由の一つは、文学が文字による literal な性質を基盤とすることにあろう。そして、文学の意義も、まさしくそこにある。

文学は、文字によって閉じ込められた仮想世界へ、わたくしたちを招き入れる。そこから先は、文字とその行間を、読者の想像力が徘徊する。これぞ至福の時空——文学好きのあなたなら、このことはよく理解できるだろう。現実から引き剥がされ、わたくしたちは文学の言葉の世界に彷徨い、そしてやがて夢の中から覚醒する。目覚めても、世界は何一つ変わっていない。けれども、長い時間をかけて、緩やかに脳髄の細胞が波打つ音を感じることがありはしないか。文学空間は、まさにその時、そこに存在する。